

研究員の眼

海外投資家は3カ月連続で買い越し

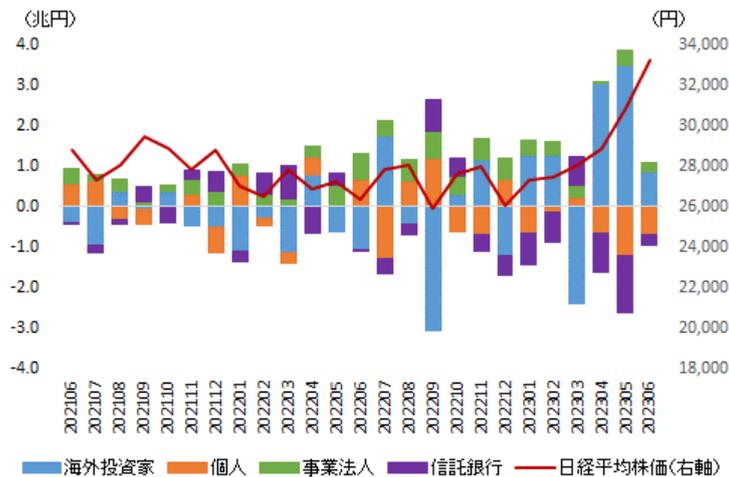
～2023年6月投資部門別売買動向～

金融研究部 研究員 森下 千鶴

(03)3512-1855 mchizuru@nli-research.co.jp

日経平均株価は、6月上旬は米債務上限問題の進展による米国株の上昇を受け、6月1日から6日まで4営業日連続で上昇し、6月6日には3万2,506円と3万2,500円を上回った。中旬にかけても、米国でインフレ懸念が後退し米国株が上昇したことを受け、日経平均株価も6月9日から14日まで再び4営業日連続で上昇し、6月14日には3万3,502円と3万3,500円を上回った。さらに6月16日には、衆議院解散が見送られたことが嫌気されたものの、日銀の現状維持決定を受けて、3万3,706円まで上昇した。下旬は、米国の金融引締め長期化と景気減速が警戒材料となり、6月27日に3万2,538円まで下落した。月末にかけては為替市場で円安が進行したことが支えとなり、日経平均株価は3万3,189円で終えた。6月はこのように日経平均株価が推移するなか、海外投資家、事業法人が買い越し一方で、個人、投資信託が売り越した。

図表1 主な投資部門別売買動向と日経平均株価の推移

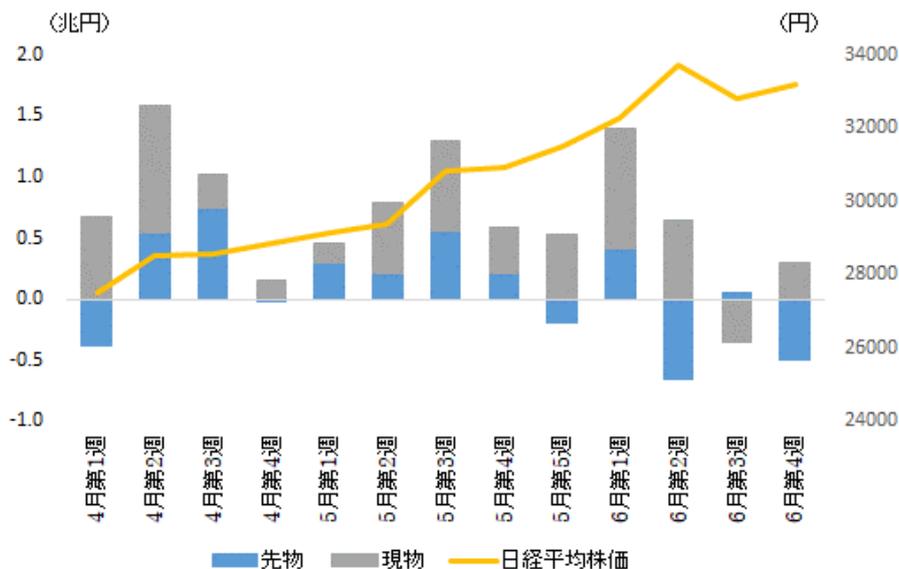


単位: 億円 (億円未満切り捨て)		海外投資家	個人	証券会社	投資信託	事業法人	生保・損保	都銀・地銀等	信託銀行	日経平均株価 (円)
月次	202304	30,360	-6,590	-125	-3,289	425	-623	-903	-9,505	28,856.44
	202305	34,709	-11,963	-845	-4,544	3,872	-424	-774	-14,276	30,887.88
	202306	8,769	-6,809	-473	-3,996	2,319	-182	-556	-2,621	33,189.04

(注) 現物は東証・名証の二市場、先物は日経 225 先物、日経 225mini、TOPIX 先物、ミニ TOPIX 先物、JPX 日経 400 先物の合計
(資料) ニッセイ基礎研 DB から作成

2023年6月（6月5日～6月30日）の投資部門別の売買動向をみると、海外投資家が現物と先物の合計で8,769億円の買い越しと、少額だが最大の買い越し部門であった。特に、6月第1週（6月5日～9日）は1兆4,000億円買い越しとなった。ただし、6月第2週（6月12日～16日）から第4週（6月26日～30日）は、現物と先物の合計では少額ながら売り越しだった。現物は6月第3週（6月19日～23日）に13週ぶりに売り越しに転じ、先物も6月第2週（6月12日～16日）、第4週（6月26日～30日）に売り越しした。4月以降、海外投資家は現物、先物ともに継続して買いがやや優勢だったものの、高値警戒感などから、6月は先物を中心に利益確定の売りが優勢となる週があった。

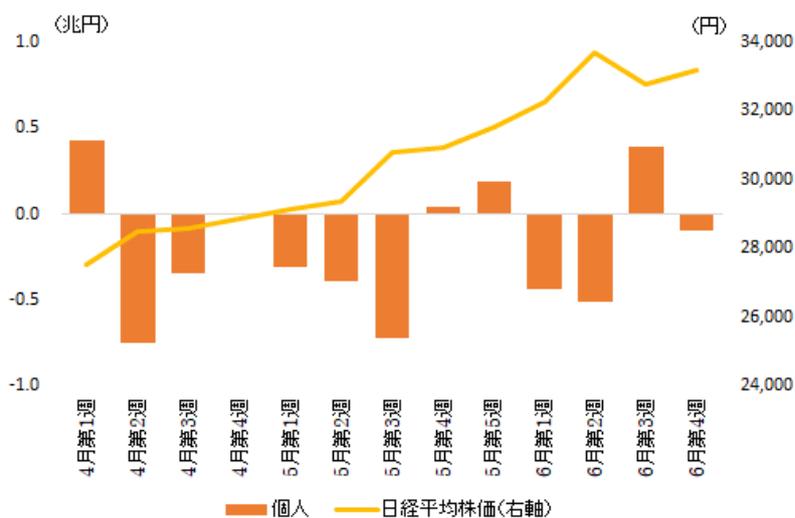
図表2 海外投資家は3カ月連続買い越しだが、利益確定売りの動きも



(注) 海外投資家の現物と先物の合計、週次
 (資料) ニッセイ基礎研 DB から作成

一方で、個人は、現物と先物の合計で6,809億円の売り越しと、6月最大の売り越し部門であった。

図表3 個人は3カ月連続売り越し



(注) 個人の現物と先物の合計、週次
 (資料) ニッセイ基礎研 DB から作成

7月から9月は、夏休みなどで市場参加者が減少し、相場があまり動かなくなる「夏枯れ相場」がアノマリーとして知られている。図表4は、旧市場第一部とプライム市場の過去5年間の平均売買高を月別にまとめたものである。確かに、7月～9月は他の月に比べて、売買高が減少傾向にあるようだ。

ただし、2023年は、4月以降日本株は海外投資家を中心に買いが入り大きく上昇する中、2023年6月の売買高は過去5年平均の1.2倍と活況だった。日本株への注目が継続するのか、7月以降の売買高も合わせて注目していきたい。

図表4 夏場は売買高が減少する傾向



(注) 2018年～2022年の平均売買高
 2018年1月～2022年3月は旧市場第一部、2022年4月～はプライム市場
 (資料) ニッセイ基礎研 DB から作成

以上

お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。